http://aosa-eye.org

アフリカ眼科医療を支援する会

Association for Ophthalmic Support in Africa（ＡＯＳＡ）

2022 年活動報告（2022 年４月～2023 年３月）

No. 15

2023 年 4 月発行

（ペンバにて内藤　毅撮影）

アフリカ眼科医療を支援する会

〒770-8503 徳島県徳島市蔵本町 3 丁目 18-15　徳島大学医学部眼科学分野内

TEL：088-633-7163,　FAX：088-631-4848

〒951-8510 新潟県新潟市中央区旭町通一番町 757 番地　新潟大学医学部眼科学講座内

TEL：025-227-2296,　FAX：025-227-0785

Ⅰ．巻頭言 ……内藤　毅３
Ⅱ．活動の現場から ……４
2022年モザンビーク眼科医療支援 …… 内藤　毅４
モザンビークでの２８年間を振り返って ……宝山晶子４
あれから４年 ……長澤利彦５
近況報告 2022～2023 ……沼田美紀５
今年は行きます！…… 井口博之６
Ⅲ．2022 年度事業報告 ……６
Ⅳ．2022 年度会計報告 ……７
Ⅴ．2023 年度事業計画 ……８
Ⅵ．2023 年度予算 ……９
Ⅶ．活動資金・物品提供者名簿 ……10
Ⅷ．「アフリカ眼科医療を支援する会」定款 ……11

（2019 年のアイキャンプ終了時の記念写真、シャイシャイにて）

Ⅰ．巻頭言

活動再開

AOSA 理事長
徳島大学大学院医歯薬学研究部特命教授
内藤　毅

コロナ禍でモザンビーク共和国（以下モザンビーク）での現地活動を中断していましたが、やっと活動が再開出来そうになって来ました。2008 年にモザンビークへの眼科医療協力を第一の目的として、アフリカ眼科医療を支援する会（AOSA）を設立し、現在まで現地で 12 回の医療活動（アイキャンプ）を行ってきました。しかし 2020 年からはコロナ禍のため現地でのアイキャンプを行うことは不可能でした。

2022 年秋から、やっとコロナ禍が収束傾向となり、海外旅行の規制が緩和されたため、私はネパールでの活動を開始していますが、海外の方がコロナに対しては柔軟に対応しているかのように見えます。

モザンビークなどの発展途上国では医療体制が脆弱で、現地での技術移転が極めて重要です。リモートでの技術指導も試みられていますが、細かい技術指導は困難で、実際に現地での技術指導が必要です。

現地活動は中断していますが、我々が継続して技術指導し、手術技術を習得した眼科医がシャイシャイ病院に赴任して白内障手術を積極的に行っていて、現地の医療状況の改善に大きな力となっています。しかし、モザンビークの経済状況の悪化による医療物資の不足は彼らの活動にとって一番の障壁の様に思われます。さらにコロナ禍のための悪影響が出て経済状況はさらに悪化しているようです。

我々の目的はモザンビークの眼科医の医療技術が向上し、独自にアイキャンプなどの僻地医療を行う事が出来るようになり、モザンビークの眼科医療が少しでも改善することです。医療物資の不足に関しては我々の力ではなかなか困難ですが、さらに現地の方々と相談して物資の確保に努力したいと考えています。

コロナ禍で国際協力の活動が制約される中、現地の人々も独自に努力しています。我々が今まで技術指導して来た眼科医が指導者となり、独自に活動を計画するようになって来ました。さらに世代交代により彼らの活動はより活発になり、良い方向に発展しているように思えます。

新型コロナウイルス感染症の収束が見え、今年は現地での活動を再開する予定です。すでにアイキャンプの日程も決まり現地と最終的な調整に入っています。コロナ禍の間に現地の様子は変わっている事でしょう。現地の事情により、我々の活動は決定されますが、慎重に状況を見ながら、安全に活動をできたらと考えています。日本の代表の一人として微力ながら国際貢献を継続する所存ですので、今後ともご支援、ご指導のほどよろしくお願い申し上げます。

（シャイシャイ病院で活躍するモイゼス先生）

（次世代を担うモザンビーク人眼科医たち）

Ⅱ．活動の現場から

2022 年モザンビーク眼科医療支援

徳島大学　内藤　毅

2022 年度も現地でのアイキャンプを計画し、保健省から現地活動許可証も得ていた。しかし新型コロナウイルス感染症パンデミック(コロナ禍)が予想以上に長引いているため、アイキャンプは断念した。そして、パンデミックも収束傾向となり、やっと感染症法における分類で２類からインフルエンザと同じ５類に変更される。

旅行制限が緩和されたので 2022 年 10 月にネパールへ行ってきた。意外と外国では規制が緩和されており、旅行者も増えてきていた。ネパールへは 10 月以降 3 回渡航したが、渡航のたびにモザンビークのアイキャンプ用に、眼内レンズや白内障手術用のナイフを購入した。10 月にはインド製の眼内レンズ 100 枚とナイフ 300 本を購入した。眼内レンズ 100 枚は、全て箱から中身のレンズを取り出し梱包した。また、ナイフ 300 本も綺麗に梱包してトランクに詰めたが、私のトランクの片面は眼内レンズとナイフで一杯となった。インド製の眼内レンズやナイフは安価でしかも品質が良く、国際基準を満たしておりヨーロッパでも認可されている。

常にモザンビーク現地在住の日本人コーディネーターの宝山さんと連絡を密に取り、現地の状況の情報収集を行なって来た。新型コロナウイルスの感染状況に関しては得られる情報も限られており、状況を慎重に把握する必要がある。現地日本大使館から発せられる情報が最も信頼できると思われるので定期的にネットで情報を確認している。また地域の安全情報もチェックしている。

モザンビークではコロナ禍のため、現地の眼科医による白内障手術件数が減少したとの報告があり、現地の状況に関して情報を共有しながら現地の眼科医の活動支援を検討した。特に、医療資材不足は経済が不安定なため困難な状況となっており、モザンビークへの医療資材の輸送を試みたが、現時点ではモザンビークへの物資の輸送は不可能に近い。国際郵便等の郵送体制が再開するのを待っているが早期の回復は期待出来ない。

さらに、現地での指導者も世代交代しつつある。我々のアイキャンプに参加して技術指導を受けた眼科医が指導者の立場へと成長し、現地での活動計画を積極的に立てている。彼らから現地での医療活動の要請があり、医療活動申請を早目に申請して欲しいとの要請があったので、早速申請に取り掛かった。以前に比べ活動許可が短時間で下り、すでに 2023 年の現地活動許可証は保険省から得ている。やる気のある現地の眼科医たちから要請があり、今年こそは現地で活動を再開する方向で進めている。

今年のアイキャンプはモザンビーク保健省の要請により Manica 州 Catandica に決定した。活動予定地はモザンビーク第二の都市ベイラから西のジンバブエ国境に近いところに位置し、眼科医がいない。すでに宝山さんが現地調査をして下さっていて、現在、現地の状況を把握しながら、活動を再開しようと準備している。

モザンビークでの２８年間を振り返って

モザンビーク　宝山晶子

２０２３年２月上旬、モザンビークは乾期から雨期に移り変わった。この変動の時期は決まって激しい雷を伴う。一晩中、レーザー光線ショーを見ているような、稲光と雷鳴と激しい風雨が寸断なく叩きつけてくるような年もあった。今年は昼間に爆音のような雷鳴を伴う雨が降った。雷は、近所の庭の高いヤシの木に落ち、住人の若い女性たち４人の命を奪い去った。

昨年１０月くらいから長い干ばつが続いていた。何度も稲の苗を植えても、降雨不足で育たなかった。ロシアによるウクライナ侵攻で小麦はじめ、穀類全般が高騰していたので、皆稲作にかけていたのだが、それもうまくいかなかった。灌漑設備の無い国では、すべてが自然任せになり、自然に翻弄される。

干ばつのあとは、決まって大洪水になる。自然のエネルギーは正直だ。すでに首都では洪水が発生している。マダガスカル沖のインド洋上でサイクロンがいくつも発生している。

私がモザンビークに来て中高校を運営してから２８年が経った。ここで、のべ１万３千人が学んだ。運営といっても、利益の追求が目的ではない。３０年間も戦争にあけくれ、疲弊し尽くした国で、利益を追求できるわけがない。開校当初はほとんどが日本の民間からの支援金で運営していたが、今は月謝と日本からの支援金の半々で運営している。

モザンビークでは教育制度がこれまで７－３－２制だったが、今年から６－３－３制になった。このため小学校７年生は、今年から中１生になった。小学校では高卒の教師がすべての科目を教えているが、中学校からは大学を出た教師が、その専門課程で学んだ科目だけを教える。例えば、教育大学の生物学科で４年間学んだ教師が、生物を教えるので、授業内容はより専門的になる。当校では、今年の教師の数は４１名。全員大学卒。その大半は、公立校の教師である。彼らは授業がある時間に来て、授業が終われば帰る。政府からの給与の支払いが遅れているときは、当校の給与で急場をしのぐ。

教室は午前と午後の二交替で使っている。午前は中学校、午後は高校といった具合である。朝は７時

から授業が始まる。一教室は４８人前後。公立校の場合三交替で、夜間の授業もある。５０人収容の教室に、１００人以上を詰め込んでいるのが普通である。それだけ子供の数が多いということだ。モザンビークの合計特殊出生率は４．８人。かつては６人だったが、今はやや減少傾向にある。

言語はポルトガル語。教育省は学校の規則を毎年変えるので、私のような外国人にとっては、ついていくだけで大変だ。学校に責任をもっているものとして、なにかあれば知らなかったではすまされない。だから、校長や教頭に聞きまくって、学校のかじ取りに支障がでないようにしている。

生徒たちには図書室で良書を提供するよう心掛けている。生徒たちから、この本をもっと準備してほしいと要望があれば、コピー機でコピーして増やす。コピー機はKONICA MINOLTA製だ。壊れにくく、何万枚もコピーできる。2機が常時フル稼働している。

今年の生徒総数は５２９名。女子のほうがわずかに多い。小学校から入学してくるとき、成績順にとるので、どうしても早熟な女生徒の数が男子生徒を上回るからだ。だが、これは高校にはいると、逆転する。女生徒は高校になると、成績は頭打ちになり、男子生徒が大きく伸びてくる。大学受験の結果発表では、男子生徒の合格者が圧倒的に多い。高卒では就職先も少ないため、ほとんどが大学進学を目指すためだ。男子は家族や社会に対する責任感が育ってくるからだろう。

今年８月ころにアイキャンプをする予定だ。これからその準備にとりかかる予定である。

あれから４年

ツカザキ病院　長澤利彦

2019 年のアイキャンプを最後にコロナ禍の影響でモザンビークにもう4年も行っていない。あれからモザンビークはどうなったのだろうか？初めて訪れた 2008 年と比べ年々発展の兆しがあったとはいえ、抱えている問題は山積みのようだ。2022年の人間開発指数でも191か国中185位と世界で最も開発が遅れている国のひとつである状況に変わりはない。また、2015年までAOSAがアイキャンプを中心に行っていた地区、北部のカボ・デルガド州はさらに困難といえる。2017年10月に始まった紛争により、100 万人近い人びとが避難生活を送っているといわれている。紛争の内容はイスラム系武装勢力による住民や外国人に対する襲撃が発生し、この勢力と地元警察や治安部隊との戦闘が続いている。この治安の悪化によりモザンビークの発展に寄与するはずであった天然ガス開発のプロジェクト工事が停止されている。2021年3月にはモザンビーク国防軍と治安部隊が港町パルマからイスラム勢力を撤退させたと発表したとはいえ、天然ガス生産と輸出開始は現時点で目標としている 2024 年から 2025 年下半期にずれ込む見込み（日本貿易振興機構のビジネス短信より）と報じられている。

こういった現状の中にコロナが発生した。日本国内でもコロナ禍で眼科医療の手術件数が激減した。これは世界的にもそうで、たとえばインドのコロナ禍で実施された白内障手術は、ロックダウンフェーズ中に COVID-19 以前の 5.6%に減少、2020 年 5 月でも回復は 86.7% までに止まっている（Indian J Ophthalmol. 2021.）。ましてやモザンビークのように国内で満足に眼科手術ができず、物資や医師を海外の寄付・ボランティアに委ねている途上国で眼科医療が十分に行われていないことが容易に想像される。

この文章を記載している 2023 年 2 月現在、まだコロナは日本で２類相当の感染症で、当院では毎日のように入院患者の感染報告があり病棟制限が行われている。以前のようにボランティア目的でモザンビークに行くことが簡単にできないことが歯痒くもある。

近況報告　2022～2023

山王台病院附属　眼科・内科クリニック
沼田美紀

2023 年になりました。世の中は行動制限がなくなりだいぶ自由に動けるようになってきた印象です。日常生活でのコロナ対策に慣れて来たのか、病院に来る方々でマスクをしないでくる方達が増えました。もちろん入り口で着用の声かけをして持参されてない方には配布もしています。車内や自宅、人のいないところで外してそのままうっかり来てしまったと言われる事がほとんどです。

私生活は変わらずコロナに振り回されながら仕事をして、休みの日は基本的に自宅で過ごす日々です。仕事ではコロナへの感染や、濃厚接触者になったからと診察や手術の変更・キャンセルの対応が日々あります。スタッフが感染者や濃厚接触者になって欠勤になると業務がとても厳しくなります。業務量が増えているのに人が減るので事故など起きないように皆で気を張っています。未だ先行きがわからないのでどこまで頑張って行かないといけないのか目標がないですが、そこは皆同じだと思うので日々を無事に乗り切ることを考える様にしています。そんな日々なので休みの日は自宅でゆっくりしたいと思い、出来るだけ買い物はまとめて行くようにして家で過ごす時間を多く取るようにしています。

この文章を書いていて昨年の報告書を書いている時と自分の生活が何も変わっていない事に気づきました。何かないかなと思い付いたのは、ついに、

職場のナースキャップが廃止になった事です。数年前からチラチラと話題になっていましたがなかなか実現していなかったのです。ナースキャップをつけていると言うと大抵冗談だと思われていました。ユニフォームを扱う業者の方にナースキャップを着用しているのは県内で勤務している病院を含めて2病院だけと教えてもらいました。 20年以上前から廃止される方向にあったので冗談と思われるのも無理はありません。

この報告書を書いている間にコロナの感染症法分類が5類に引き下げになる方向と発表がありました。今年はアフリカでの活動に参加出来るのではと期待しています。1年の間が空くだけでも自分の記憶と体力が心配なのですが、今度は4年ぶりです。なんとかついていけたら良いなと思っています。活動されている皆様と無事に再会できるよう祈っています。また応援してくださっている方々の健康を願っています。今後ともよろしくお願いします。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

Ⅲ．2022年度事業報告

“アフリカ眼科医療を支援する会”
モザンビーク眼科医療支援2022

（１）事業実施状況

2008年からの12回の現地医療支援プロジェクトの成果をもとに2022年も例年と同様に6月にシャイシャイで行う予定であった。しかし新型コロナウイルス感染症パンデミックが収束しないため中止となった。

（２）事業計画中に生じた課題等と対処内容

① 2022 年は活動を早期の段階で中止していて航空券の購入等も行っていなかったので問題はなかった。

② 今までに現地へ送った医療物資は現地在住の日本人コーディネーターの自宅で保管中であり、丁寧に管理されている。しかし経年変化や、使用期限の制約もあり、見直しが必要である。内藤のネパール渡航時にインド製の眼内レンズやナイフを購入した。また中古Aモード測定器を入手した。

③ モザンビークへ向けての郵便小包（船便）は現時点で利用できないままである。次回のアイキャンプの時には大量の物資を携行する必要があると思われるので、すでに物品リスト等を準備中である。手荷物超過料金も高額となるので、準備を入念に行なっている。

今年は行きます！

井口博之

コロナ禍のため現地での医療活動が３年連続で出来なくなってしまった。今までモザンビークで多数のアイキャンプに参加してきたが、３年連続で中止となったのは初めてである。視力を回復した患者さんの喜ぶ顔を見るのは大変うれしいことで、アイキャンプを続ける意義でもある。医療の行き届かないモザンビークではコロナ禍の影響も厳しいと想像している。しかも、目の見えない患者さんたちはさらに厳しい状況になっているのではないかと気になっている。恐らくたくさんの患者さんが待っていることであろう。

今年は現地での活動が再開されることになったので是非参加したい。今後も AOSA の活動に協力していきたいのでご支援よろしくお願いします。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

（３）事業の成果

我々が技術指導してきたモザンビーク人眼科医が指導者的立場となり、独自に事業計画を立てつつある。また、シャイシャイ病院に赴任した眼科医は、独自に白内障手術を行っている。アイキャンプが出来なくても彼の努力で成果があがりつつある。また彼らが独自にアイキャンプを計画し実行に移そうとしている。

コロナ禍で物資不足が深刻で、アイキャンプの際に我々が現地に残してきた医療物資も消耗し、現地での医療物資の不足が問題となっている。この点に関しても彼らだけで問題を解決しようと努力している。今後現地の方々と検討し医療物資の調達方法を模索する。

（４）広報活動など

①当会のホームページを更新した。さらに動画(YouTube)なども更新し、世界に向けて発信しつつ、充実したものに改善した。(http://aosa-eye.org)
②我々の活動を広く理解して頂くために、広報活動を行った。2022年6月24日～26日、阿波銀プラザで内藤が写真展「Shining Eyes 瞳輝く子どもたち」を行ない、AOSAの活動も紹介した。③2022年12月9日、徳島プリンスロータリークラブ例会で講演した。

Ⅳ. 2022 年度会計報告

収入の部

１．寄附金	998,468
２．助成金＊	500,000
３．繰越金	3,361,612
４．利息	38
計	4,860,118 円

＊ 助成金内訳

徳島プリンスロータリークラブ	300,000
徳島県眼科医会	100,000
徳島大学眼科同窓会（黒瞳会）	100,000
計	500,000 円

支出の部

支出項目

１．モザンビーク眼科医療支援プロジェクト	
白内障手術器具・医薬品等	120,000
計	120,000 円
２．その他	
日本眼科国際医療協力会議会費	50,440
印刷代（会報など）	105,440
送料	35,140
計	191,020 円

総支出合計	311,020 円
次年度繰越金	4,549,098 円
計	4,860,118 円

Ⅴ．2023 年度事業計画
（2023 年４月１日～2024 年３月 31 日）

“アフリカ眼科医療を支援する会”
第 13 回支援プロジェクト
モザンビーク眼科医療支援 2023

１．事業の趣旨及び目的

新型コロナウイルス感染症の流行の収束を見極めて行動する予定である。過去 12 回の支援プロジェクト結果をもとに第13回支援プロジェクトを計画した。

①　モザンビークで日本人医師による白内障手術を行うことにより、白内障による失明患者の軽減に貢献する。失明者は貧困に拍車をかけているため、手術によって視力を回復した人たちは労働力となり、貧困の改善に寄与することになる。

②　人口約 3,000 万人に対し、眼科医は約 20 名にすぎず、危機的状況である。過去にアイキャンプで技術指導した眼科医がシャイシャイ病院に就職している。彼の技術の上達状況を確認し、彼が発展的に指導者として活躍出来るようにバックアップしたい。さらに、現地の眼科専門課程研修希望者への技術指導、アイキャンプ参加の資金的援助を行い、モザンビーク人眼科医の育成を支援する。現地の方々と相談し技術支援する方針である。

③　モザンビークでは大部分の医師は都市に偏在し、特に周辺地方では、病院に行く機会に恵まれず、病気に関する知識に乏しい。病気に罹患しても約６割の住民は祈祷師に頼る。多数例の白内障手術を行うことにより、医療従事者の研修および地域住民に正しい医学情報を伝えることができる。

２.事業の内容

過去の活動と同様に、「モザンビーク共和国保健省」と「アフリカ眼科医療を支援する会」との共催でプロジェクトを行う。「モザンビーク共和国保健省」は、眼科医療支援活動を行う病院を指定し、現地医師、看護師、眼科助手などの病院スタッフを動員し、我々 NGO のスタッフと協力して患者治療にあたる。「アフリカ眼科医療を支援する会」は、眼科医師、看護師など眼科医療の専門家を現地に派遣し手術を行う。また手術用顕微鏡、手術器具、眼内レンズなどの医療機器、医療材料や医薬品を提供する。

本プロジェクトは、「在日モザンビーク共和国大使館」、「在モザンビーク日本大使館」、「徳島大学医学部眼科学分野」、「新潟大学医学部眼科学講座」および現地で活動を行っている NGO「モザンビークの学校を支援する会」より支援・協力を受けている。

①　“アフリカ眼科医療を支援する会”
第 13 回支援プロジェクト

既にモザンビーク保健省からはモザンビークの第２の都市のベイラから近い場所での活動要請があった。アイキャンプ地は Manica 州 Catandica である。要請に従って 2023 年８月、第 13 回眼科医療支援活動（アイキャンプ活動）を計画中である。今後の活動は新型コロナウイルス感染症流行の原地の収束状況によって決定される。現地に 1 週間滞在し、白内障による失明患者約 100 名の手術施行を目標としている。日程は以下である。

8/23(水)日本発
8/24(木)モザンビーク（ベイラ）に到着
8/25(金)陸路、ベイラ～カタンディーカへ移動
8/26(土)～8/30(水)眼科医療活動（診察・手術）
8/30(水)午後：ベイラへ移動
8/31(木)帰国の途に
9/1(金)帰国

今回は、日本人眼科医２名に加えて、モザンビーク人眼科医 1 名および眼科専門課程で研修中のモザンビーク人眼科医師２名と共に手術を行い、モザンビーク人医師への手術教育を行う予定である。手術用顕微鏡、オートレフケラトメーター、眼軸長測定器をフルに使用してより質の高い手術を行う予定である。

2022 年度は現地でのアイキャンプは実施できなかったため、多数の患者さんが押し寄せることが予測される。このためどうしてもソーシャルディスタンスの確保が困難となる。現地でのコロナワクチンの接種状況、コロナ禍の収束状況を現地保健省と検討しながら現地での活動内容を決定する。

② 眼科専門課程研修希望者の支援

モザンビーク人眼科医の育成が急務であり、この点をモザンビークの関係者に説明しているが、保健省の政策では眼科専門課程の定員は年間1－2名のみである。根本的に医師数が限られているので、問題解決には時間を要する。長期的視野に立ち現地で指導するとともに、関係者とともに教育体制を改善するために意見交換をしている。国立エドアルド・モンドラーネ大学医学部眼科教授兼マプト中央病院眼科部長でモザンビーク眼科医のリーダーであるマリアーモ女史と協議し、毎年２名の専門課程研修医師をアイキャンプへ招待し技術指導を行なっている。本年も２名程度招待する予定である。

３．事業の長期展望

（１）現地の協力

根本的な医師不足のため、特に地方においては病気に罹患しても、大多数の住民は祈祷師による伝統的治療を受けている。我々の眼科医療支援活動により、地域住民および医療従事者に眼科医療に関して啓蒙することが出来ると考えている。実際に多数例の白内障手術を行って失明患者を救済することで、地域住民および医療従事者に眼科医療の重要性を理解してもらうことが出来るようになってきた。

さらにモザンビークの眼科医療体制の根本的な改善には、眼科専門医の育成が不可欠である。眼科専門課程研修希望者を対象に、長期的な視野でモザンビーク人眼科医の育成を支援する必要がある。このためには大学での手術教育の改善強化を試みる必要がある。

これらの目的を達成するためには、モザンビーク共和国保健省を軸に、モザンビーク人眼科医をはじめ関係者と連絡を密にし、協力体制を強化する必要があり、引き続き連携していく予定である。コロナ禍のため困難な状況であるが、現地と相談しながら継続して行く。

（２）将来展望と資金計画

アイキャンプを継続して行うことで、モザンビーク保健省との信頼関係がより強固なものとなって来た。コロナ禍の状況で活動が休止状態であるが、今後現地の意見を聞きながらさらに発展させて行く必要がある。

モザンビーク人眼科医の養成に加え、教育システムと診療体制の強化、さらには総合的にシステムを見直し、インフラの整備が目標となる。特にモザンビークにおける医療機器の管理体制を強化する必要がある。これらの計画の主役はモザンビークの人たちであり、彼らとの話し合いにより計画の細部を決定していく。将来的には徳島大学と現地大学との大学間協定締結やJICAプロジェクト等への申請も考慮していく。また草の根無償資金協力等の資金獲得も計画していく。

広報活動など

我々の活動を理解して頂くために昨年度と同様に積極的に広報活動を行った上で、寄附等を要請していく予定である。

①ホームページの充実

広報活動にホームページは不可欠であるため、今年度はさらにホームページを徐々に充実させる予定である。また動画サイトへの投稿なども積極的に行って来たがさらに充実させる予定である。

②眼科学会等での発表

眼科関連学会等のインストラクションコース等で発表予定である。

Ⅵ. 2023 年度予算

収入の部

寄附金	1,000,000
助成金	500,000
繰越金	4,549,000
合計	6,049,000 円

支出の部

1. モザンビーク眼科医療支援プロジェクト

白内障手術器具等	400,000
医薬品等	300,000
渡航費補助	600,000
現地移動費等	200,000
現地滞在費等	400,000
雑費	250,000
小計	2,150,000

2. その他

印刷費	150,000
通信費	100,000
雑費	200,000
予備費	3,449,000
小計	3,899,000
合計	6,049,000 円

Ⅶ. 活動資金・物品提供者名簿

（2022 年４月１日～2023 年３月 31 日、順不同、敬称略）
たくさんのご寄附ありがとうございました。
お礼申し上げますとともに、ここにご紹介させていただきます。

（徳島県）
糸田川　誠也、井上　創太、井上　砂智子、
井上　須美子、井上　昌幸、江村　俊二、大村 和正、
賀島　誠、兼松　誠二、鎌田　泰夫、川端　昌子、
菊地　恵里子、木下　導代、工藤　英治、篠賀　健、
篠賀　知代、塩田　洋、島　裕美、菅井　哲也、
髙橋　順子、武田　美佐、竹林　優、多田　糸図、
谷　貴美子、豊永　寛二、内藤　毅、中西　淑子、
中屋　由美子、西内　貴子、仁田　美智子、秦　聡、
秦　裕子、深田　君代、布川　毅、藤井　邦隆、
牧野谷　卓宏、松本　治恵、三河　洋一、
水井　研治、美馬　彩、盛　隆興、山口　景子、
山田　修三、山根　伸太、吉浪　弘子、吉村　久
黒瞳会、コンセール合唱団、徳島県眼科医会、
徳島プリンスロータリークラブ

（香川県）
赤澤　嘉彦、大豆本　恵里奈、小路　竜一、
川口　みさ子、坂口　恭久、谷崎 勍、早馬　由美子、
平井　健一、松村　香代子、三崎　昌史、
吉田　慎一

（高知県）
内田　佳永、田内　芳仁、戸田　祐子、林　しの、
林　勇樹、林　正和、山中　清香

（愛媛県）
木内　康仁

（兵庫県）
長澤　利彦、野口　三太朗
ツカザキ病院

（大阪府）
井口　絹江、井口　博之、大中　信行、森　菊枝、
山本　幸子、吉田　恭子

（滋賀県）
尾崎　志郎

（新潟県）
阿部　春樹、荒井　紳一

（東京都）
社本　真紀、中川　和美

（茨城県）
沼田　美紀

（鹿児島県）
田上　純真

（モザンビーク共和国）
宝山　晶子

（企業など）
（株）アーガス・ビー・エム・シー、
エイエムオー・ジャパン(株)、
（株）エムイーテクニカ、（株）オーヒラ、
参天製薬(株)、日本アルコン（株）、
（有）山口メディカル、
(株)リブドゥコーポレーション

（寄付していただいた医療器材等、2019 年）

（ネパールで購入したインド製眼内レンズ 100 枚）

アフリカ眼科医療を支援する会　定款

第１章　総則

名称

第1条　このNGO（民間非政府組織）は、名称を“アフリカ眼科医療を支援する会”とする。

第2条　英語名をAssociation for Ophthalmic Support in Africa (AOSA)とする。

事務所所在地

第3条　このNGOは、主たる事務所を下記に置く。

徳島事務所：徳島県徳島市蔵本町3丁目18-15
徳島大学医学部眼科学分野内

新潟事務所：新潟県新潟市中央区旭町通一番町757番地
新潟大学医学部眼科学講座内

第２章　目的および事業

第4条　このNGOは、眼科海外医療協力を行い、主としてアフリカ諸国の眼科医療の発展を支援し、アフリカ諸国の人々を失明の危機から救うことを目的とする。具体的には、眼科医師等のスタッフを現地に派遣して医療活動を現地で行い貧困のために治療を受けられない人々に対する眼科医療支援を行うこと､および現地の医療スタッフに対する眼科医療の技術向上のための教育を行うことをNGO設立当初の目的とする。

第５条　このNGO設立当初は、モザンビーク共和国を医療支援の対象とするが、人道的見地から活動は全世界にわたる。

第３章　会員

第６条　会員の種別

・正会員　このNGOの目的に賛同して入会した個人および団体
・賛助会員　同会設立目的への賛同者

第７条　入会金　入会金はとくになし

第８条　年会費　このNGOの設立当初の会費は、次に掲げる額とする

・個人　年会費　　１万円
・団体　年会費　　５万円

第９条　入会、退会については自由とする。ただし、正会員は役職につけば、相応の理由がない限り、職務を全うすること。

第４章　役員および選任等

第10条　このNGOに以下の役員を置く。

理事２名以上１０名以内、顧問２名以上６名以内
理事のうち、１名を理事長、１名を副理事長とする。

第11条　理事は正会員の中から選出する。

理事長・副理事長は、理事の互選とする。

第12条　理事が会計を兼務することは可能とする。

不正など、背任行為があった場合は、除名とする。

第５章　総会

第13条　このNGOの総会は、正会員をもって構成する。

第14条　通常総会は、毎年１回開催する。

第15条　総会は、以下の事項について議決する。

１）定款の変更
２）事業報告および収支決算の承認
３）その他運営に関する重要事項

第６章　会計

第１６条　会計報告は、年一回収支決算報告書としてまとめる。元帳、領収証は別に保管する。

第１７条　会計年度は、４月１日から翌年の３月３１日までとする。

第７章　雑則

第１８条　このNGOの役員は、次に掲げる者とする。

理事長　：内藤　毅　　徳島大学大学院医歯薬学研究部特命教授
副理事長：荒井紳一　　あらい眼科院長、新潟大学医学部眼科非常勤講師
理　事　：井口博之　　東淀鋼材（株）会長
理　事　：長澤利彦　　ツカザキ病院
理　事　：沼田美紀　　山王台病院付属内科・眼科クリニック
顧　問　：阿部春樹　　新潟大学医学部眼科名誉教授
顧　問　：塩田　洋　　徳島大学医学部眼科名誉教授
顧　問　：福地健郎　　新潟大学医学部眼科教授
顧　問　：三田村佳典　徳島大学医学部眼科教授

（敬称略：50音順）

第１９条　この定款は2015年4月１日、一部訂正し、これを施行する

（アイキャンプのスタッフたちと記念撮影、2019年）